

百年の栄光　一世紀の時を越え

## 済美学園創設者 熱意の人 澤田亀・船田ミサヲ

済美高等学校 一色和壽子

えひめの  
媛たち



晩年の澤田先生、寄宿舎の庭にて。昭和18年頃。先生は終生和服で通された。



バットを手にした晩年の船田先生。先生はスポーツが大好きであった。昭和25年頃。先生は終生和服と伊予弁で通された。済美には大正10年頃野球（ベースボール）をしていた記録（写真）がある。

今年、創立百周年を迎えた、済美高等学校の校門を入るとすぐに、

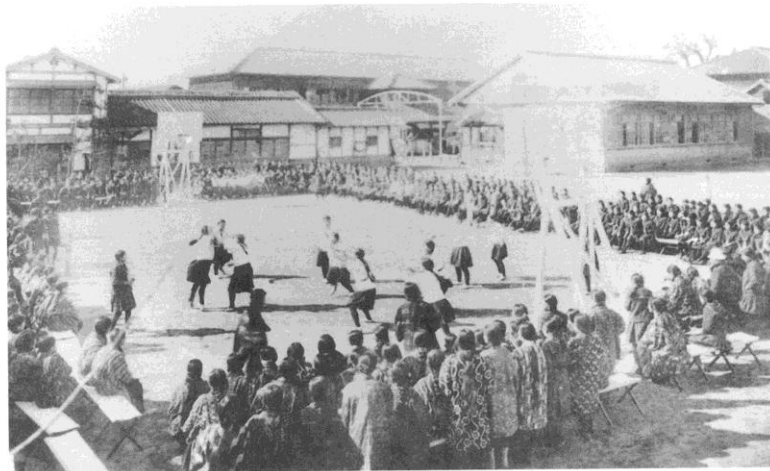
澤田亀先生 頌徳碑

「恩師澤田先生は明治三十四年澤田裁縫学校を設立の後船田先生と協力更めて済美高等女学校の経営に當られ終生私達子女の教育に心血を注がれました。茲に其徳を稱え并せて慈恩に報いる微意を表し此碑を建てました」

船田ミサヲ先生 胸像

「この学園を創め この学園とともに 生きてこられた 先生を 記念するために 先生を慕うものたちが集つてこの像を建立した」

碑と胸像とが並んで、行き交う千八百余の在校生を常に優しく見守っている。いずれも済美学園同窓生達によつて建てられたが、この文意の



バスケットの試合、大正十五年。スポーツの盛んな学校である。試合をしている生徒は洋服、応援をしている生徒は和服。

中に、教育の道一筋に情熱を燃やし続けて生きた、二人の女性の生涯が明記されている。

澤田亀は一八六三年（文久三年）土佐藩士笹村茂之の長女として生まれ、明治十二年郷土澤田栄之助に嫁した。澤田家は富農であった。亀は農家の嫁としてよく働き、寺子屋教育を受けただけではあつたが、足踏みの米搗きをしながらも、読書をすると言ひ勉強家であつた。相次いで四人の男児をもうけて普通の安定した生活を送っていた。

ところが、明治二十六年、三十歳の時、夫が病死する。生活は苦しくなり養蚕を試みたり小学校で裁縫を教えたりして働いた。しかし、このような生活では、将来の見通しが立たない。「なんとか自立しなければならぬ」と考え本家筋の親戚を頼つて上京し、渡辺裁縫学校の速成科に学び、小学校準教員の資格を得て帰郷した。しばらく高等小学校などに勤務した。しかし、彼女の希望はあくまでも、「女性が、自立できるだけの仕事を身につける、裁縫学校（塾）をつくりたい」ことであつた。高知は塾の盛んな所で、新しく創ること

は難しかった。そんな時松山はそれ程ではないことを聞き、明治三十四年三十九歳の時、単身松山に来て、北原町に「澤田裁縫伝習所」を開いた。東京仕立てであることや、メートル法で教える新しい指導法が評判となつて生徒が増え、翌三十五年には二番町に移転し、三十六年には「澤田裁縫女学校」となった。県内各地から生徒が集まり、寄宿舎まで持つに至つた。明治三十六年末松山に永住することを決意して、末の子供と共に歩いて三坂峠を越えた時には、四十歳を過ぎていた。

船田ミサヲは一八七二年（明治五年）松山藩士白川親応の長女として生まれた。大きな材木間屋で、拜座という劇場を持ち、非常に裕福であつた。しかし、その幸せはミサヲが六、七歳になった頃から傾き始め、追い打ちをかけるように、体格の堂々とした進取の気性に富んだ父は急逝した。ミサヲのすぐ上の兄の義則は中学校をやめて小学校の代用教員となり、母は縫い物やかせ糸繰りで生計をたてた。母親は控え目で優しく辛抱強く、賢い女性であつた。苦しい生活の中でも子供の教育には



昭和7年澤田先生と寄宿生

運命的な出会いとなった。  
明治四十一年澤田亀の澤田裁縫女学校と船田ミサヲの家政女学会が合併し、私立愛媛実科女学校が設立された。明治四十四年、愛媛実科女学校と勝山高等学校と合併し、済美高等女学校（四年制）・済美女学校（三年制）となった。合併による生徒数の増加によって二人は、広い校地を求め、校舎増築の為の資金集めに奔走することになる。現在地の湊町七丁目に移転してからは、ミサヲは校内の南側に住み、亀は北側にある寄宿舎に舎監として生徒と共に、戦災に遭うまで住んだ。二人は学校の



船田先生を囲んで昭和23年（公職追放解除の日）

理事であると同時に教師として最後まで教壇に立つて生徒の育成に努め、車の両輪のように力を合わせて生徒の為に全力を尽くした。  
二人の上に戦争と言う至難はあったけれども、戦後見事に立ち直り、澤田亀は慈母の如く生徒達に敬慕されながら昭和二十二年三月二十六日八十六歳で永眠した。船田ミサヲは教育功労者として知事表彰。学制発布八十周年記念功労者として文部大臣賞。藍綬褒章を受け、昭和三十一年五月十九日八十五歳で永眠した。  
一九〇一年（明治三十四年）、町の一家に数名の生徒を集めて始まった学校が今、済美学園として、済美高等学校・済美幼稚園・済美平成校（中高一貫校）と、学園の規模を拡大し、生徒数二千三百余人、卒業生数約四万人に発展した。来年度からは女子校であった済美高等学校も男女共学校になる。この一世紀の経過を創設者の二人は共に喜んでくれていると思う。  
いっしょに、かすこ 一九三三年生まれ。済美中学校・済美高等学校卒業。愛媛大学教育学部卒業。済美高等学校国語講師。済美高等学校同窓会会長。南海放送学園「王朝文学・瀧氏物語」講師。NHK文化センター「子規に親しむ」講師。ライフワークは平安朝文学研究。



現在の済美高校の校舎（城山を背景に）



澤田先生の頌徳碑と船田先生の胸像



済美の校名の由来の碑

決して手を抜かなかった。義則は、陸軍士官学校に進み、後陸軍大臣・男爵・元帥の位がおくられている。ミサヲには、琴や舞の習い事は続けさせ国漢の塾にも通わせた。「女はしつかり家を治め、子供を育てないかん。そのためには、女こそ勉強しとかないかん。」母は常にミサヲにこう言い聞かせた。この教えがミサヲを女子教育に一生をかけたと言えろ。ミサヲの成績は抜群によく、高等小学校卒業後、小学校教員見習いとなる。やがて正教員となり、広島の高等女学校で家庭科を教えている。  
二十歳の時、伊予鉄道技師長の船田金太郎と結婚した。結婚してすぐ、私立松山幼稚園の保母主任となった。夫は、ミサヲをよく理解し、その力を存

分に伸ばしてくれる最良の協力者であった。やがて幼稚園に「母の会」を創った。この会が松山市婦人有志の「勝山婦人会」へと発展し勝山女学校の経営を引き受けることになった。以後ミサヲは婦人問題や社会奉仕の中心となって活躍する。一年程でこの学校からは手を引き、女学校卒業者を対象にした「松山家政女学会」を設立した。彼女は幼稚園児の世話をしなが「この可愛い子供の成長は、母親の育て方で決まる。心も身体も健康な母親になる女性を育てる、理想の女学校をつくりたい。」と考えた。  
この二人の女子教育に対する燃える熱意が、「松山にもう一校、高等女学校を創ろう」と言う気運によって